

家庭に於ける諸儀式 (承前)

後閑 菊野

其五 歳首の祝

舊年を無事に送つて新年を平らかに迎へたのを喜ぶのは自然の人情でございます殊に公に於ても國をおぼし民をおぼす大御心からとりわけて新年をお祝ひになるのでございますからめい／＼の家に於ても相當の禮を備へて祝意を表すべきであります。

一月一日の公の御儀式を四方拜と申します四方拜とは天皇陛下が御親ら天地四方山陵に向はせられ御拜を遊ばされて當年の豊穰を祈り天災地妖を拂ひ給ふ御式でございます今の御代に於ては午前四時に天皇四方を拜し給ふ先づ西方皇大神宮を并し次に天神地祇を拜し又神武天皇の御陵及び孝明天皇の御陵を拜し其の他四方の神社を拜し給ひ畢り

賢所 皇靈殿及び神殿を拜し給ふ御定めなるよし細川氏の祝祭日講話に載せてございます昔は上御一人のみならず庶民に至るまで各之を行つたところが古書に見えて居ります。

此の日各家に於て行ふ儀式は其の家の貧富身分の高下などによりまして一様ではございませんけれども之が標準として一例を舉げて見ませう歳末から門には松を立て又は注連飾をなし家の内外をよく掃き清めて新年を迎へる準備をいたします。

座敷床の間の裝飾は家々によりて同じではございませんが舊慣によりまして新年にふさはしい掛物をかけ松竹梅などの花を活け又鏡餅、鬘斗などをも飾つて祝意を表するが普通でございます新年はふのづから人の心もあらたまるのでございますから特別の裝飾をして一家恙なく新年を迎へたことを祝ひ兼ねて年賀の客を歓迎する意をあらはすやうにしたことでございます例へば掛物が松竹梅の三幅對であるならば活花は椿又は南天に水仙など青とか二幅對で竹と梅との畫で

あるならば花を松とし寒菊をあしらふなど又花を松竹梅とするならば掛物は福神の一幅物など、するが似合はしいではございませすまいか置物も鶴龜又は福神などめでたいものを選び又鏡餅の臺をおくもよろしうございませう棚飾はやはりいつもの如く軸物、書籍、香具、手箱、寶石の類を位置よく配列し又歳首には特に熨斗三方を押板の處にかくこともございませう序に申しますが舊幕府の頃には年始の客に對しては必ず熨斗三方を出す習ひでありましたが今大かた廢れました只床又は棚の飾りに用ゐるのみとなりました然し舊式を守る家に於てはやはり之を年賀の客に供することがないでもございません

次には祝の式のことを申しませう

一月一日は朝早く起きて手洗ひ口漱ぎ頭髮を調へ衣服を改め神前に鏡餅及び其の他の供物を進め燈火を點じ然る後天照大神を拜して皇室の御繁榮を祝し奉り次に祖宗の靈を拜するがよろしうございませすさて後一家打寄つて互に年始の祝言を述べたるが普通でございませう若し數多の婢僕を使ふ家

ならばまた夫等の者の祝賀をも受け然る後各の前祝の膳を供へ屠蘇を持ち出で、幼者から飲み初めます屠蘇の肴にはごまめ、敷の子、黑豆などを添へることが習はしになつて居ります

屠蘇の祝は古くから行はれたこととございまして朝廷に於ても昔から行ひになつたことが諸書に見えて居ります内々行事に二袋紅の切にて五寸ほどに鱗形にして柳の枝に糸にてつくつとわり又韻語陽秋に或人問屠蘇は必ず幼者より始むるは何の故ぞや答へて曰く少者は歳を得て倍々榮ゆるが故に之を先にす老者は歳を失ひて衰ふるが故に後にす天子元旦四方拜の後に御齒固を供へ而して典藥頭屠蘇酒及び白散を獻じ藥子をして先づ之を嘗め試みしめ然る後之を奉る嵯峨天皇弘仁年中始めて之を行はせられ今に至るまで士庶人亦之を用ゐるなりと記されて居ります

此の祝式は三ヶ日毎朝之を行ふ家もございませす又略して一日のみに止める家もございませす又其の家の貧富や家風に從つて其の式にも輕重の別がございませすけれども其の精神に至つては何れもかは

ることはございません  
 祝式しゆくしきが終りおひましたらば或は朝賀あさむかひに或は學校がくちやうの遙拜ようはい  
 式しきに或は年賀ねんがの廻禮くわいらいにかもむくなど人々家々の事  
 情じやうに従ふしたががよろしうございます二日及び三日も亦  
 一日に準じゆんじて總べての式しきを行ひます昔は二日は事  
 始めと申まをて書初かきま、讀初よみま、縫初ぬいまなどいろくの業  
 を初める式しきを行ひました子供などに之をさせます  
 のは家庭教育かていけいよく上じやうおもしろいこと、ぞんじます今商  
 家で二日に初荷はつにを出しますすのも同じ心こころでございま  
 せう

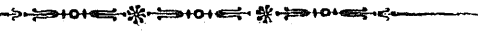
五日は新年宴會しんねんえんくわいとして百官諸臣かんししんに宴えんを賜ふ日ひでござ  
 います其の恩命おんめいを受けるものは君恩きんおんの忝かたじけなさを思  
 ひ謹んで皇室こうしやうの御榮ぎやうを祝いわひ奉るべきでございます  
 六日或は七日には門松注連飾かどまつしづなざりなどをとりいれて平  
 常じやうじやうに従するが例でございます七日はすい菜すいさい、すい  
 しろ、五行ごぎやうはこべら、佛の座ほとけざ、芥かひなづなの七く  
 さを集めあつ之を粥かゆに雜まじへ餅もちを入れて七種粥しちしゆじゆとなへ  
 之を食する習なづかはしがありません今もなほ此の日には  
 餅もちを入れ菜なをまじへて粥かゆをつくる家が澤山たくさんござい  
 ます

十五日は小豆粥あづきかゆを煮る習なはしでございませうが土佐  
 日記にき正月十五日じやうげにじふごにちの條に『けふあづきかゆ煮にずくち  
 をし云々』とあるを見ますれば古くからの習なづかはし  
 と見えます  
 又昔武むかしでは具足ぐそくに鏡餅かがみもちを供へて軍神ぐんじんを祭まつ  
 ふことがありましたその鏡餅かがみもちを煮て祝いわふのを鏡開かがみひら  
 と申しまして足利將軍家あしかがぐんぢやうけでは正月二十日に行はれ  
 徳川家の頃は十一日に行はれる定めであつたと申  
 します。

次には年賀ねんがの客きやくに接する心得こころえを述べませう  
 年賀のため訪問ほうもんを受けましたときは豫かねて裝飾さうしやくの  
 してある座敷ざしきに案内して相當の場處ばうぢよに着座させ主  
 人にんが出て新年しんねんの挨拶あいさつをのべ茶ちやをすしめ菓子かしを供し  
 次に屠蘇とそを進めます普通の年賀客ねんがきやくに進める膳部ぜんぶは  
 吸物あぶりもの、口取くち、煮豆にまめ、數の子かずのこなどで十分でございま  
 せう猶別に酒さけや飯いひを進めようと思ひますときには  
 相當の品種ひんしゆを添へることは人々の隨意じゆいでございま  
 す屠蘇とそは銚子さしこに入れ三つ組みつぐみの盃さかづきを臺たいに載せて出  
 すが普通ふつでございませう正式せいしきは三献さんけんを進める筈はずで  
 ございませうからたとへ客きやくは辭退じたいをしましても一獻いつけん即

ち三度は必ず注ぐべきものでございませう  
 年賀の客は大抵僅の時間を數十軒を訪問しようとするのでありまして道を急ぐ人でありませうから大概は玄關で賀辭を述べて直に歸るが常でありませうして道の遠いためとか多忙のためとかで平素は無沙汰をする人も年の始ばかりは特に訪問して交情を温めようとする人が多いのでございませうそれに只下婢或は年の若い書生などに取次をさせ甚しいのは名刺臺ばかりを置いて折角の好意を空しくするのは交際の法を得たものではございませう故になるべく主婦もしくは家族中で之に次ぐ處の人が親ら出まして應接しますならば來訪者をして満足させることが出來從て客を遇する禮を全うしたものと云ふことが出來ませう  
 次に年賀の爲他を訪問するときの心得を申しませう家内の祝式を終へました後は會長者を始めとして親戚知己等日頃から交際する家々を訪問して新年の賀詞を述べることがよろしうございませう服装は男女とも禮服を着用すべきでありませうたとへ親しい間柄でも餘り略したのは失禮に當ることとござ

いますから身分相應に盛裝するがよろしうございませうさて一通りの挨拶が終りましたらば時宜を見はからひまして床飾などを見ますこともございませう之は主人の用意に對する禮儀の一つでございませう又熨斗三方などを出されましたときは叮嚀に之を受けて挨拶をすべきでございませう屠蘇を出されたる時主人から進められましたらば三度即ち一獻は必ず之を受けるがよろしうございませう一杯で止めるのはよろしくありませぬ  
 年賀の訪問には必ず名刺を持つて往くがよろしうございませうさもないうときは來客の多い新年の折柄といひ又は不在のことも多い時でありませうから混雜したりまたは間違を生じなとして好意を空しくすることがございませう  
 年賀の廻禮は家々の事情によつてしかと定めることはできませぬが成るべくは七日以前に於てするがよろしうございませうそれより後になりますと一般に新年の諸飾をも取り去り饗應の具なども平生に復しませうから萬事が複雑に赴き敏捷を主とせぬばならぬ今日におきましては成るべく遅延せぬ



やう務めるが交際上至當のことです。近々歳首に於ける交際上の煩ひを厭つて近郷に旅行を試みる人が年々多くなるやうです。之は大なる誤りでございませう前にも申した通り元來新年の交際は交情を温めるに於て必要のことです。でございませうから務めて此の時期を利用して平素の缺禮を償ふやうに心懸けねばなりません。尤も身體の虚弱な人などは数日の休暇を得て或は海邊に出かけたり或は暖地に移つたりして保養をするといふことも然るべきことで決して咎むべきではございませうけれども世間には懶惰の人がありまして實際に旅行もしないのに表面上不在を粧つて家の中に籠り安逸を貪るといふやうなのがあるさうでございませう。不徳の甚しいものといつてよいのでございませう。

終りに忌服ある家のことに就いて一言申しをへておきませう。忌服のある家では新年の諸飾を廢し祝式を擧げぬが至當でございませう。けれども世務繁多なる今日に於ては五十日の忌でもなほ籠居するといふ譯にはゆかぬのでございませうからとて一

ケ年間の喪に服して一切世事を顧みぬといふやうなことは行はるべきことではございませう。それでございませうから新年なども人を訪問するのは憚るがよろしうございませうけれども他からの賀詞を受けることは差支はございませう。但し家内に於ける諸祀式は喪中に於ては一切行はぬが當然でございませう。又國民一般に哀悼の意を表はすべき不幸に遭ひましたときは新年の諸祀式一切を廢するは勿論のことです。でございませう。

又忌服ある家に對しては如何すべきかと申せば忌中は勿論新喪から凡そ六ヶ月以内は新年の賀詞を述べないがよろしうございませう。故に此の場合に於ては一月七日以後に於て普通の訪問をして慰愉の意を表はすやうにするがよろしいでございませう。

△之は困つたもの

余の日本に在る頃、一友嘆じて曰く「僕一兒あり、歸郷に八、彼れに貯蓄心を養成せんと欲し、與へるに遜信者手切手貯蓄金を以てし、使を爲す毎に、一錢乃至錢の切手と貼付せる切手の増加するを喜びしが、忽ち其好奇心キ果て、僕は錢なんんかば要らない、誰か使なんぞをするものか、一威張りものだ、此れ實に困つたものなり、士族根性も困つたものだ、此れ實に困つたものなり」